

神奈川山梨教会連合会たより

# かりん

## 戦いの終息を願いつつ

金光教神奈川山梨教会連合会

信徒部次長 吉岡裕子



21世紀にも  
なつて、世界を  
巻き込むよう  
な戦いが起き  
ようとは。

ロシアと言  
えば、トルスト  
イやチャイコ

フスキー、また、ボリショイサーカス、バレエ、オペラなど芸術文化の国としても知られている。私は子どもの頃からロシア民謡を口ずさみ、民族衣装を身につけた踊りも見せてもらった。この時代に戦争をしかけてくるような国だったとは青天の霹靂であった。

30年前にロシアを訪れた。考えてみるとソ連が崩壊した直後だったようだが、そんなことも知らずにツアーに参加したのだった。そういえば、「この国は普通の国とは違

うので気を付けるように」と毎日のように注意されていた。しかし、そんなことも感じることなくツアーのコースを巡った。

まず、地下鉄が見学コースに入っていた。地下鉄なんてと思いはしたが、とにかく猛スピードのエスカレーターで地下深く降りていくと、そこはシャンデリアや大理石で造られ、核戦争にも耐えられるようなシェルターになっていたのだ。まるでこの時のためにとでも言うように。

また、ガラスケースに安置された、多くの人が列をなして手を合わせていた。ベトナムのホーチミン廟も同じように安置されていた。時々ロシアでメンテナンスをするという。何か共通の国のあり様がうかがえなくもない。

かつてのレニングラードはサンクトペテルブルグになっていて、水の都と呼ばれ美しい都市であった。現地のガイドの方にチエルノブイリはどうなっているのか尋ねてみたが、知らされていないのか、知っているても口止めされていたか、話を聞くことができなかった。遙かに離れている日本でさえ大騒ぎになっていったというのに。しかし、その時には既にウクライナになっていたのだ。また、キエフという駅があったが、ロシアでは終着駅が駅名になるということ、その頃盛んに行き来していたことがうかがえ残念でならない。

この理不尽な戦いに対して、多くの国は

制裁を科しているが、ロシアの国民は食については自活している、さほど困らないとコメントしていた人がいた。ロシアの人はウィークデーはモスクワに住んで仕事をし、週末は別荘に帰って野菜やお花などを育てているという話しを思い出した。ウクライナとともに穀物地帯だそう、日本も小麦を輸入していることを初めて知った。戦いをしなければ小麦や石油を輸出して、お互いに経済や生活もうるおうというのに。戦いをして良いことは何もない。

とはいえ、国と国のバランスを保つことは容易ではない。特に、ロシア周辺の国も、ロシアに細心の配慮をして自国を守っていたに違いない。そうそう、それにつけて思い出したことがある。公園にサツチャーさんから贈られたカルガモの像があった。それを見て、みんな目を細めて心ませたのだった。これまでに訪れた国々からは、日本の企業が来てくれて生活が豊かになった。日本語学校を作ってくれて助かっている等々、日本への感謝ばかりだった。日頃から良い関係を築ていくことがどんなに大切なことか。戦いからは何も生まれない。そればかりかその爪痕は後々までも続き消えることはない。

ロシアで求めてきたマトリョーシカや琥珀、キャビアやアルメニアのコニャックなどを思い出しながら、この戦いが一刻も早く収まることを祈るばかりである。

## 「女性のつどい」が開かれました

6月12日(日)、コロナ感染を心配しながらの「女性のつどい」も三年目。今年も無事に開催することが出来た。

昨年の「女性のつどい」終了直後、次回のテーマが決まったが、それは神奈川県梨布教130年の記念事業ともピッタリ合った「信心の継承」。

今回は若い人に焦点を当てた。信徒部の大先輩のご尽力で発表者に打診、一人目が決まり、会場も金光教武蔵小杉教会2階ホールと決まった。

発表者は20代、30代、50代と若々しいエネルギーが溢れる方々。参加者も44名とホールに入りきれいかと心配されたが、机と椅子をうまく配置し、換気を十分行ってお練り合わせを頂いた。



お一人目は横浜西教会から井上黎さん、22歳。今年大学院生とられた。0歳から

お母様と共に教会参拝。お教会のご家族とも親しく楽しい時間を過ごされたが、小学生となり何気ない会話から、友達とのギャップに違和感を感じるように。中高時代は

勉強に部活に忙しく、高3の時に経験した金光教フォーゲル連盟主催のソアリングキャンプに参加したことで違和感も吹っ切れた。それは参加者20名、教祖奥城の前でご神号奉唱を心の底から願いを込めてやった体験である。

「リーダーとして頑張ろう！」と気持ちも新たに大学生となった。勉強もバイトも得意気込んでいたが心と身体に不調をきたした。気が起こらない、思うように動けない、不安、緊張、吐気、嘔吐に見舞われ、休学を余儀なくされた。

お教会の先生にお届けすると、「不安は神様に預けて」「何でも神様からさせていただく心で」「自分ですると思うから不安になる」とご理解下さり、体調、心が回復した。

卒業論文では中国の作者を通して、「文学とは何か」というテーマに立ち向かった。ところがコロナ禍に会い通学も出来ず、資料も集めづらい、友人との情報交換もできなくなった。さらに休学した分の単位取得など様々な問題が出てきた。一つ一つの問題を神様に預けて楽しんで取り組めますように、とお願ひし、不調の時は無理をしないうで休み、やる気が出たら一気に集中してやる。お練り合わせを頂き、締め切りの3日前に提出することが出来た。

ゼミの代表者に選ばれたトップバッターで発表することになった。その中で、井上黎さんのモットーである「他人のことも祈

る」こと、後輩の参考になるようにと願ひつつ取り組んだら、発表者の中で一番となり、願ひ以上のことが起きた。無事に卒業もでき、大学院に進むこともできた。有り難いことだらけ。

井上さんにとって「信心の継承ができた」と言えるのは、難儀に会い、神様に心を向けたくなった時に、神様に向けられるように土壌を作っておくことと話された。

絵本の読み聞かせをお仕事になさっているお母様から言われたこと。「誰も相談する人がいなかったら教会に行っていたらいいんだよ」教会に行く事を強制されず、「それは有り難かったね」と常に励まされていたお母様に感謝されていた。



二人目は藤澤翔さん、32歳。昨年の丸子教会での「女性のつどい」では、お母様の藤澤昌子さんが宮崎のご両親のことを語られた。

目が不自由になられたお父様をお母様は「絶対に神様を離さない」という信念のもとにお父様の手足となり献身的に尽くされた。またお父様も「信心は幅広く、奥深く、高さがあ

ように神徳を頂かねばならない」と。昌子さんはご両親の様な信心がしたい、と話された。

そしてそれは翔さんにも伝わった。お爺さまから「嫌いな人と仲良くなりなさい」と言われたそう。嫌いな人にこそヒントがある。だから夫婦でも真逆な人間ほど考えに広がりができる(？)考えの合わない、色んな人と交わる大切さを学ばれた。また、おばあ様からは優しさ厳しさを受け継がれたお母さまを通して、見てこられた。誰でも分け隔てなく接し、苦難に対しても前向きな考えを身につけられている。

おばあ様は、きつと辛い苦しいことも沢山有つたろうに辛い顔をしているのを見たことがない、と言われた。

翔さんが大学3年生の時に、山田信二先生が所長をされていた国際センター主催でタイの社会問題を学ぶスタディツアーに参加され、現地の人と触れ合う機会を頂かれた。現地の人は厳しい環境の中でも生き生きと生きている。置かれている状況の中で必死に生きている。貧しい事は不幸ではない、他者と比較しない、ありのままを受け入れ、できたことを喜ぶ。今の日本にいと偏つたものの見方をしていると気付かされた。

現在、もうすぐ1歳になる男の子を育てているが、とても大変だ。一日々々を乗り越えている。奥さんが疲れきっているのを

見る時、ここで夫婦関係を試されているなと思う。「何で伝わらないんだろう！」と思うがやはり子ども自身の成長があるのだ、と思い返す。

信心の継承も、見て聞いて肌で感じるこゝとが大切。時間はかかるし、失敗も必要。対話を続けていく事が、信心の継承に繋がっていくのではないかと話された。



三人目は小橋華世さん、元気はつらつ53歳。主に少年少女会でお育て頂かれ

た経緯を具体的に楽しくお話くださった。

幼少時は母方のおばあ様、お母様と共に玉水教会に参拝。帰りに、ざるそば、フルーツタワーを食べるのが楽しみだったとか。5歳の時、お父様の転勤で沖繩に。新規布教されていた林雅信先生の元で、華世さん、弟さん、先生のお子さんと4人(その内1人は赤ちゃん)で少年少女会を始められた。「天津祝詞」をあげたり、「神人の栄光」を歌ったり、教祖様の漫画を通して実意丁寧を教えて下さった。小1の時、遺骨収集も体験した。頭骸骨から木の根が出ているのを見たときは、恐怖と無念さを感じた。中2になると福岡に転勤。福岡高宮教会

の吉川先生の元で少年少女会活動をやった。鼓隊の練習、山や海での合宿、夜店やお化け屋敷など学校とはひと味違う楽しさがあった。

今は立派な体育館があるが、当時はお広前を舞台にして出し物をやった。

母はリーダーをしていて「良いおじいさん 悪いおばあさん」「新・桃太郎」など独自の芝居の脚本を書いて皆を楽しませてくれた。そういう母が誇らしかった。

横浜に移り神奈川教会にお引き寄せ頂いた。

そこではピクニックや餅つきなどの集会はあったが、鼓笛隊はなかった。「じゃあ作ればいいじゃん」という母のひと言で弟と2人から始めた。

これらの事を通して、人を指導することの難しさを経験したり、人間関係を築いていく中で今の自分にお育て頂いたと思う。そして今はピアノ講師をしているが、人を育てる御用に使って頂いていると思っている。

現在は母、娘と三世代で武蔵小杉教会にお参りし、共通の話題に



# 2022 (令和4) 年度 生神金光大神大祭日程

| 教会名       | 日 程              |
|-----------|------------------|
| 甲府教会      | 10月16日(日) 13時30分 |
| 小田原教会     | 10月23日(日) 14時    |
| 登戸教会      | 10月23日(日) 13時    |
| 横浜西教会     | 10月23日(日) 13時30分 |
| 大明教会      | 10月30日(日) 13時30分 |
| 南甲府教会     | 10月31日(月) 11時    |
| 横須賀教会     | 11月3日(祝) 13時30分  |
| 生麦教会      | 11月3日(祝) 13時     |
| 丸子教会      | 11月3日(祝) 11時     |
| 相模原教会     | 11月3日(祝) 14時     |
| 平塚教会      | 11月5日(土) 13時     |
| 子安教会      | 11月6日(日) 13時30分  |
| 鶴見教会      | 11月11日(金) 13時    |
| 武蔵小杉教会    | 11月13日(日) 11時    |
| 大磯教会      | 11月14日(月) 13時    |
| 野毛教会      | 11月19日(土) 13時30分 |
| 藤沢教会      | 11月20日(日) 11時    |
| 布教開教120年祭 |                  |
| 神奈川教会     | 11月26日(土) 11時30分 |

花を咲かせ、共励会をしている。

今回このように若い方々のお話を聞かせて頂き、それぞれの形、内容にしっかりと心が受け継がれているなあ、と感心させられた。それは期待以上のものであり、これからの金光教へのメッセーが沢山盛り込まれていた。もともともこの金光教の素晴らしさ、信心の喜びを噛みしめ生活させて頂き、周りに伝えていかねば、と会場全員が心を新たにさせられたひと時だった。  
(報告 山田初子)



## へお知らせ

◎ご霊地集会のご案内

神奈川山梨布教130年の節年に、本部大祭参拝に併せて、左記のような集会を企画しております。どうぞご参加ください。

▽ご霊地集会… 10月1日(土)

14時30分～16時30分

金光英子先生のお話

「二代金光様の信心について」

※終了後に金光様お退けお見送りをさせていただきます。

▽ご霊地ツアー… 10月2日(日)

12時30分～14時30分

① 正門↓大教会所↓修徳殿↓立教聖場  
↓明かすの灯籠↓教祖奥城↓教団墓地↓祭場(約1時間)

② 右記コースの後に、教庁展示室など(約2時間)

③ 絵師迫墓地↓小野家墓地↓学院↓教学研究所(約2時間 健脚向き)

※右記のコースを予定し、霊地ガイドの方のご案内ください。研究所では、資料の閲覧も予定しています。

※詳しくは教会配布のチラシをご参照ください。

## 金光教神奈川山梨教会連合会

発行者 山田 信 二

〒245-0017 横浜市泉区下飯田町926・23  
金光教横浜西教会内